

第三四回大会の印象

村長 利根朗

ふと目を覚ますと、高山さんが今度の大会の感想を書いてほしいと申される。じつは前夜、目がさえて明け方まで寝つかれず自由研究はほとんど居眠りをしていた。眠っていたことは存じてますと。司会席から見えていたらしい。だから、私の感想は課題報告とそのあとの討論の部分だけになる。

今年の課題も「村落と土地」だが、副題は「村落の変貌と土地利用秩序」となった。

「変貌」というところが去年と異なる。最近、ここ数年來、日本農業を取りまく環境がますます厳しくなっていて、米をはじめとする農産物にたいする国際的な圧力、それをうけて農業の合理化・改革をせまる苛酷な国政が、農業における生産性の向上と土地利用の合理化を迫っている。資本はすでに農業を補助する気持ちも余裕もなくなっている。日本に農業はいらないという極論も出てくる時代になった。減反政策・農地転用・基盤整備。転作・土地改良・過疎・混住化・・・に伴う村落の変容という事実が、去年の諸報告の散見していた。「村落の土地管理機能」の喪失が日程にのぼってきた。二、〇〇〇年続いた日本のムラが今、壊れつつあるという実感が側々として身に迫る。村も部落は為政者にとっても便利で都合のよい組織であった。いまやそれすら御用済みになろうとしている。村研は

そのあとを追隨するような氣もするが、今年は「村落の変貌」という副題がつくこととなった。という程度の予備知識をもって今年の大いに臨んだ。設定された共通課題にそって三つの報告と特別報告が一つ行われた。

西川善介氏の報告。印象記というにふさわしく甚だ勝手な感想で申し訳ないが、私は西川氏の報告の真意を把握できなかった。氏は「具体的な史料をとおしてしか語らぬ」という趣旨のことを報告の中で仰言っていた。氏が提示した史実は理解できたかぎりでは、まことに興味深かったのであるが、トータルとして氏は何を私達に語るうとしていたのか。私の貧しい理解では、近世の村においては「行政上の村」と「生活共同体としての村」とは乖離しているといふことを一貫して主張し、且つ、部落が生活共同体であり、入会の利用益あるいは所有の団体でもあった、ということのようであった。とはいうものの、私は氏の真意を誤解しているかもしれないという危惧が多分にある。「印象」としてこれを許していただきたい。

岩本由輝氏の報告。種を蒔き、串を立て、縄を張るといふ行為が土地の占有を表示し、したがって重蒔・串差・絡縄が占有権にたいする不当な侵害にもなるという研究があり、今までの最も克明な分析は、延喜式所収、六月晦の大祓の祝詞等に依る中村吉治氏のものであった。岩本氏はこれと同種の史料を中世初期・中世後期・近代について博搜・提示している。重蒔（あるいは播種）・串差・絡縄による土地占有権表示の史料がこれだけ一堂に会したのは初めてであろう。神代の時代から近代に至る一貫した何かがあるという理解であろう。報告の表題に「本源的土地所有とムラの土地利用秩序」とあるが、今回の報告とあとの討論に関するかぎり、私の聞きおと

しかもしれぬが、提示された史料とムラとのかかわりは、はっきり打ち出されていたとはいきれぬ。むしろ研究通信一四一号所載の東北地区研究会報告のあとの討論で、これと共同体とのかかわりが有効に論議されていたように思う。それにしても、五世紀と推定される大祓の祝詞の段階で、播種による土地占有を承認したのは共同体であろうが、爾来二〇世紀の今日まで共同体もずいぶん変化している。共同体の所産である呪術に代わって近代国家の権力が、判決などという形で関与してきている。重蒔（播種）・串差・絡縄の社会的意義もずいぶんかわっていろいろ。岩本氏がこの辺を千篇一律に考えているはずはないから、その辺のことも語ってほしかったように思う。

長谷川昭彦氏の報告。共通課題の副題がそのまま、長谷川氏の報告の表題になっているように、学会が提起した課題に正面からとりくんだ報告であった。氏が自ら構築した理論を開陳したもので、理論の出発点を土地におき、単なる大地から国土というカテゴリーを展開している。従って、農地だけでなく、林・工場・住居・レクリエーションの場などまで含めた各部門を統合した土地利用体系とその利用秩序を包括するモデルの中で村落の土地利用秩序を立論し、村落に三つの段階の理念型を設定する。

1、村落共同体 家が未熟な段階の村落

2、村落競合体 家が競合している段階の村落

3、村落複合体 農家と脱農化しつつある家の複合した村落

の、それぞれに固有の土地利用体系が対応するという趣旨の提案である。内容まで述べるわけにはゆかないが、従来の経済学・経済史の側から大いに異論が出そうだ。それにしても、氏の理論体系を

おおざっぱにでも、その発想の根底から組上にのせてということもなかった。語意にかかわる二三の質問がでたにとどまった。

三者三様の報告で、討論の司会者の方々も苦勞なざったと思うが感想を述べる側の気持ちも少しくちぐはぐだ。特別報告の永田恵十郎氏の「過疎村落の明暗」は現に危機に瀕している村の再生の試みを述べたもので興味深かった。去年訪れた渥美半島の果物と花にだけ依頼する農業と、その昔柳川で行われた、岩手県の志和農協で実践しているという多角的経営の報告（佐藤正氏）を思いだした。